

2016年1月3日 MJCC 主日礼拝メッセージ 要約 柏倉秀吉師

聖書 ピリピ 1:27、2:1-2

タイトル「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく」

<ご挨拶>

主の年 2016年、明けましておめでとうございます。

日本では、「一年の計は元旦にあり！」と、今年の向かうべき方向性を明確にする。MJCCはどうか。祈りの中で本日の箇所が導かれた。この箇所を一言でいえば、「神が教会に望んでいること」と言える。

MJCC 一人一人が「神が教会に望んでいること」を実行していく 2016年でありたいと思う。

聖書箇所：ピリピ 1:27、2:1-2

27 節初めの「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」を中心に 4 つの視点から教えられたいと思う。

①「ただ一つ」

この「ただ一つ」という言葉は、文字通りには「唯一の」という言葉である。パウロは確信をもって「ただ一つ（唯一の）」と書き出し、文を強調している。新共同訳ではそれを「ひたすら」と訳している。英語の NKJV では「only」、NIV では「Whatever happens(何が起こっても)」と訳している。

パウロは、それほどこのことが「ただ一つ(唯一の)」本当に大切なことである!と、ピリピの教会のクリスチャン一人一人に認識してもらいたいという思いがあった。

これは、たくさんある中の一つの大したことというものではない。クリスチャンにとって、いや、命を持っている人間すべてにとって「ただ一つ(唯一の)」「ひたすら」「only」「Whatever happens」大切なことであるという意味での「ただ一つ」ということである。

②「キリスト」

その「ただ一つ」の実体こそが、「キリスト」である。「キリスト」であって「自分」ではない。私達は物事考えていく時に、やはり自分が基準となる。自分の考え、自分の思い、今をどのように生きるべきか、その計画や行動、そして他の人についても、自分の考えが基準となっている。たとえどんなに優れた考えを持った人物だとしても、命を生み出すことはできない。それは「キリスト」にしかできないことなのである。

だから聖書は、私達人間の命にとって「ただ一つ(唯一の)」「キリスト」と教えているのである。

ここで「キリスト」について大切なのは、自分が知っている、或は信じているといった知識としての「キリスト」ということではなく、「キリスト」の考え、思い、行動という、キリストと共に生きている! 本当の信仰が大切なのである。

では、キリストと共に生きるためには、私達はどうしたら良いのか。

それは聖書を読まなければならない。私たちの考え、行動一つ一つを起こす前に、キリストに祈り、キリストの考えを伺うことが大切である。時に、忍耐を持って答えを待たなければならないこともあるだろう。そうした、一つ一つの信仰による行動から、キリストと共に生きている!という実感と感謝と確信がますます与えられ、深められ、神からの平安と誠の命の息吹がその人々の内に満ち溢れるということが、このキリストの内にはあるのである。キリスト以外には、この満ち足りた誠の命というものは無い。それが「ただ一つ。キリストの・・・」という意味である。

③「福音」

福音とは、言語的にはギリシャ語でユアングリオン＝良い知らせという意味だが、アングロサクソン語では、ゴスペルと言う。英語では、グッドニュースであるが、福音の本質的な意味は、キリストの十字架による人間の罪に対する贖いである。別の言葉で言えば、神との和解とも言える。

そしてこの十字架の贖い、神との和解とは、神（キリスト）が私達を愛しているからこそ与えてくださったものである（ロマ5：8）。

クリスチャンとは、そのキリストの愛を実感した者である。クリスチャンがこのキリストの愛に感謝して生きていく時、キリストのように自分の命をも他者へささげ、また犠牲にして行くことが出来る！という信仰者としての生き方に変えられていくのである。（1ヨハネ3：16－19を参照）

福音にはこのことが含まれている。すなわちキリストがしてくださったように、私達もその姿にならって、歩いていくことなのである。それが福音と言える。

④「ふさわしく生活する」

「ふさわしい」という言葉は、ギリシャ語で「値するように」という意味がある。また「生活する」というのは、「市民として生活する」ということ、または「社会の一員として義務を果たして生きる」ということ、それから、「生活と信仰が結びついた地に足をつけたこと」という意味がある。

新改訳聖書の脚注には、「御国の一員として」とある。

つまり「御国の一員として値するような、生活をする」ということが、この直訳になる。

パウロはこの箇所ではわざわざ「市民としての生活をする」ということばを使ったのは、このピリピという街が、非常に豊かな町であるという背景があったからである。使徒の働き16章には、ピリピの人たちがローマ市民であることに満足していた様子や、そこでの生活も安定し、楽しみも喜びも十分に味わっていることが記されている。そうした中、人々はわざわざ迫害されてしまうようなキリスト教に回心しなくとも良かったのだが、人々の中にはキリストの真実を知り、もはやこの世の一時的な楽しみでは満たされない真理のうちを歩むことを決心した者達がいた。それがピリピの教会の人々である。

パウロは、そうした背景を持っているピリピの教会の人々を励ます意味で、

「御国の一員として生活しなさい。」と記し、後のピリピ4章では「私達の国籍は天にある」と、御国を思うように！と記しているのである。

私達も、どんな時も御国の一員であることを忘れてはいけない。

これが「ただ一つ、キリストの福音にふさわしく生活する」ということであり、すべてのクリスチャン、すなわち「教会に神が望まれていること」である。